

学会発表

広島市における散発事例および集団事例食中毒の比較解析(平成10年~12年)

山岡弘二<sup>\*1</sup> 石村勝之 児玉 実<sup>\*1</sup> 橋渡佳子  
山本美和子 上村真由美 毛利好江 野田 衛  
佐々木敏之 藤井彰人 河本秀一 笠間良雄<sup>\*2</sup>  
池田義文 荻野武雄

平成13年度日本獣医公衆衛生学・中国  
2001.10.21~22 広島市

平成10年~12年の広島市で発生した散発および集団食中毒事例について比較解析した。食中毒届出数は散発事例2,216件,集団事例101件であった。原因食品判明率は散発事例23.8%,集団事例23.8%,原因施設判明率は散発事例52.5%,集団事例5.3%,原因物質判明率は両者とも98%以上であった。主要病因物質は集団事例がサルモネラと腸炎ピブリオ,散発事例はカンピロバクター,サルモネラ,病原大腸菌,腸炎ピブリオであった。散発事例由来株の中に集団事例由来株や他の散発事例由来株と同一のPFGE型を示す株が存在し,diffuse outbreakが示唆された。

\*1: 現 社会局保健部食肉衛生検査所

\*2: 現 社会局保健部食品保健課

広島市の *Salmonella* Enteritidis 分離株の疫学解析(1998-2000)

佐々木敏之 石村勝之 橋渡佳子 児玉 実<sup>\*1</sup>  
河本秀一 山本美和子 毛利好江 笠間良雄<sup>\*2</sup>  
山岡弘二<sup>\*1</sup>

第47回中国地区公衆衛生学会  
2001.8.31 倉敷市

1998年~2000年に広島市で分離された患者由来 *S. Enteritidis* 73株(31集団事例由来31株,散発事例由来42株)について,ファージ型(PT)別試験および薬剤感受性試験を行った。3年間をともし6薬剤に感受性でPT4の株が主流であったが,1999年,2000年にはAM,SM耐性を示し,既知のPTと一致しないRDNC(reaction does not conform)型の株も多数検出された。このAM,SM耐性,RDNC型分離株17株について *Bln* I, *Xba* I を用いたパルスフィールドゲル電気泳動による解析を行った結果,14種類の遺伝子型に分類された。

\*1: 現 社会局保健部食肉衛生検査所

\*2: 現 社会局保健部食品保健課

広島市の散発性カンピロバクター食中毒の疫学的検討

石村勝之 毛利好江 山本美和子 橋渡佳子  
児玉 実<sup>\*1</sup> 佐々木敏之 蔵田和正<sup>\*2</sup> 伊藤文明<sup>\*2</sup>  
河本秀一 笠間良雄<sup>\*2</sup> 山岡弘二<sup>\*1</sup> 荻野武雄

第22回日本食品微生物学会学術総会  
2001.10.18~19 大阪府

欧米やわが国において,散発性の食中毒や下痢症の主要な起因菌であるカンピロバクターは,広島市における散発性食中毒の届け出件数においても,2000年には第1位となった。そこで,保健所における患者からの聞き取り調査結果と当所で行った分離菌株の血清型,薬剤感受性,PFGE解析,鞭毛遺伝子 *flaA* のPCR-RFLPおよびその塩基配列の比較検討を行い,広島市内での本菌散発食中毒の発生状況を疫学的に考察した。

\*1: 現 社会局保健部食肉衛生検査所

\*2: 社会局保健部食品保健課

水系環境および鶏肉におけるサルモネラ汚染

中野宏幸<sup>\*1</sup> 赤澤 彰<sup>\*1</sup> 北口暁子<sup>\*1</sup> 河本秀一  
石村勝之 山岡弘二<sup>\*2</sup>

第22回日本食品微生物学会学術総会  
2001.10.18~19 大阪府

自然環境や食品における食中毒細菌の分布状況の把握は食中毒予防基盤を確立する上で重要である。水系や鶏肉のサルモネラ汚染について調査を行った結果,水系では16%から,市販鶏肉では70%が陽性であった。市販鶏肉由来株の血清群は07群が多く,大部分が *S. Infantis* であった。水系環境では水温(15℃)とサルモネラの相関がみられた。水試料では37℃,2時間の回復培養後,43%の増菌培養が有効であった。河川分離の *S. Oranienburg* は,イカ菓子食中毒事例株とRAPD法で差異は認められなかった。鶏肉由来 *S. Infantis* はRAPDおよびPFGE解析で同一のパターンを示した。

\*1: 広島大学大学院生物圏科学研究科

\*2: 現 社会局保健部食肉衛生検査所

## サルモネラおよび腸炎ピブリオの環境分布

赤澤 彰\*<sup>1</sup> K.サティヤムルテ\*<sup>1</sup> 北口暁子\*<sup>1</sup>  
中野宏幸\*<sup>1</sup> 河本秀一

第 74 回日本細菌学会総会  
2001.4.2~ 4 岡山市

自然環境における食中毒細菌の生態把握は食中毒予防対策を講ずる上で重要である。今回、魚介類の養殖の盛んな瀬戸内海水、流入河川水についてサルモネラと腸炎ピブリオを対象に調査を行った。その結果、サルモネラは小河川を中心に検出され、血清型では、*S. Typhimurium*, *S. Oranienburg* が多くみられた。検出は水温(15 以上)と相関がみられたが、pH、塩分、汚染指標菌との関連は低かった。腸炎ピブリオは、海水では夏期に 100% の検出率を示した。一方、冬期にも一部の地点で検出された。耐熱溶血毒産生株は分離されなかった。

\*<sup>1</sup>: 広島大学大学院生物圏科学研究科

## 結膜炎由来アデノウイルス 8 型分離株の疫学解析

池田義文 阿部勝彦\* 野田 衛 荻野武雄  
第 42 回日本臨床ウイルス学会  
2001.6.7~8 名古屋市

1983~2000 年に結膜擦過物から分離されたアデノウイルス 8 型(Ad8)129 株について、14 種類の制限酵素(RE)を用いて切断パターンを比較した。*Bam*H I, *Bcl* I, *Bgl* II, *Bst*E II, *Kpn* I, *Sac* I, *Sma* I, *Eco*R I, *Pvu* II で 2 種類, *Bgl* I, *Sal* I, *Xho* I で 3 種類, *Hind* III と *Pst* I で 4 種類に分けられた。*Bgl* I のパターンは全て標準株と異なった。以上の結果から、分離株は 1~3 種類の RE で標準株と異なる Ad8p 群(69 株)と、11 種類全ての RE で異なる Ad8a(60 株)に大別され、前者はさらに 6 種類の遺伝子型(Ad8p1~Ad8p6)に分けられた。1983~95 年夏の期間は Ad8p 群が混在していたが、1995 年夏以降は全て Ad8a に入れ替わった。

\*: 現 (財)広島市農林業振興センター

結膜炎由来アデノウイルスの制限酵素切断解析  
池田義文 上村真由美\*<sup>1</sup> 阿部勝彦\*<sup>2</sup> 野田 衛  
藤井彰人 山岡弘二\*<sup>3</sup> 荻野武雄

平成 13 年度日本獣医公衆衛生学会(中国)  
2001.10.21~22 広島市

1996-2001 年に分離されたアデノウイルス(Ad)19 型 9 株, Ad22 5 株, Ad37 4 株を用い、制限酵素(RE)切断解析を行った。Ad19 は標準株とは *Hind* で同じ、他の 9 種 RE で異なった。1983-86 年の株とは *Sma* I と *Eco*R I で異なり新しい遺伝子型(GT)であった。Ad22 は供試 RE で全て標準株と異なった。1986-89 年に検出された 3 種類の GT とは 6 種 RE で異なり、新しい GT であった。Ad37 は標準株と 7 種 RE で同一、*Pst* I と *Sac* I で 4 株中 3 株が、*Eco*R I で 4 株全てが異なり 2 種類の GT に分けられた。1983-86 年に検出された 3 種類の GT(p, a, b)との比較では、1997 年の 1 株は a 型を示し、他の 3 株は新しい GT であった。

\*<sup>1</sup>: 現 社会局保健部食品保健課

\*<sup>2</sup>: 現 (財)広島市農林業振興センター

\*<sup>3</sup>: 現 社会局保健部食肉衛生検査所

## 4-ニトロトルエン・ベンゾフェノン・スチレン 2 量体及びスチレン 3 量体の分析法の検討

小中ゆかり 尾川 健 世良勝利\*

平成 13 年度全国環境研協議会  
中国四国支部会議水質部会  
2001.5.17~18 山口県

内分泌攪乱作用があるとの疑いがもたれている物質のうち、4-ニトロトルエン・ベンゾフェノン・スチレン 2 量体(4 物質)及びスチレン 3 量体(7 物質)の計 13 物質について、分析法の検討を行い、河川の環境調査を行った。

1 溶媒抽出による分析法は、回収率良好であり、13 物質同時分析が可能である。検出限界値は 0.01 µg/l であった。

2 固相抽出による分析法は、固相カートリッジ・溶出溶媒の種類など、抽出条件を変えて検討したが、回収率が半分以下の物質が多く、現段階での同時分析は難しい。

3 広島市内の河川 7 地点において環境調査を行ったが、全地点において、13 物質すべてが検出限界値未満であった。

\*: 現 安佐南区厚生部

## 底質中の環境ホルモン物質の前処理方法について

下田喜則 矢野泰正 世良勝利\*

第 28 回環境保全・公害防止研究発表会

2001.10.31～11.1 仙台市

外因性内分泌攪乱化学物質（環境ホルモン）の調査対象は多種多様であり，分析法も物質ごとに多岐にわたっている。そこで，分析においての夾雑物の軽減化，操作の簡素化を目的として，既存の分析法をもとに改善点を加えた前処理方法を考えた。

この度は，室温アルカリ分解法による多成分分析，フェノール類，フタル酸エステル類とアジピン酸ジエチルヘキシルについての前処理方法を検討し，良好な結果が得られた。

---

\*：現 安佐南区厚生部